

【翻訳】

ロバート・ブラウニング  
「書簡—アラブの医師カーシッシュの  
不思議な治療経験を含む—」

吉 門 牧 雄 訳

学問の屑くずを拾い上げる者、  
神の御手の業わざに興味がない訳ではない者から、  
(神はこの人間の肉体を見事に作り、  
泡のように息を吹き込み、粘土のように捏ね、  
神の口から出る、あの一吹きひとふきの蒸気である人間の魂を、  
しばらくの間、地上に閉じ込めて保存した)  
アビブ先生に書簡をお送りします。  
アビブ先生こそは私たちの学芸に精通し、  
まだまだ未熟な技量ではありますが、  
私が誇りとしています医術を、  
私の中に生み出してくださったお方です。  
このお方は私と同様に、  
余りの圧迫と緊張のために、  
どのようにせんつうが痙攣が肉体に起こり、  
それによって時期尚早ながら、  
ずる賢い蒸気のような魂が抜け出して、  
元の居場所に戻りたいと思っているかを詮索し、  
神には及ばずながら、  
巧みに、そのような痛みを抑えることによって、  
蒸気との戦いを工夫することにおいては最適の方です。  
放浪の学者である私から、  
本国に在住の賢者であられる、  
あなた様にご挨拶（健康と知識、平和に関する名声）と、  
本物の蛇石の標本三つ、もっと珍しいものとして、  
他の種類のメロンの形をした贈り物をお送りします。  
(これは細かく打ち砕けば、  
薬というよりまじないに向いているものです)  
今、私は第二十二回目の書簡を書いております。

私の旅はついにエリコに至りました。  
こうしてまた通信を始めます。  
私たちの学問に熱心な者なら、  
少しの苦勞を厭うことはないでしょう。  
私は十分に汗をかいてきました。  
この土地の数多い堅い行路で、  
身も骨も瘦せ果てました。  
また、田舎ではこちらに向かってくる行軍の噂で燃えています。  
ヴェスパシアヌスが来るといふ人もいれば、  
その息子が来るといふ人もいます。  
黒い大山猫が唸り声をあげ、  
房付きの耳をそば立てました。  
私の血を狙う渴望から、その黄色い眼球を輝かしたのです。  
私が叫び声をあげ、杖を投げると、逃げて行きました。  
二度も、盗賊は私の身ぐるみをはがし、打ちすえました。  
一度は、町全体が私をスパイだと宣言しましたが、  
やっとのことでエルサレムに着きます。  
一夜を過ごした粗末な隠れ場所のある、  
このベタニヤは重症の疫病傷を負った人が、  
エルサレムから出て来て、倒れて死ぬまでに、  
走り着ける程の距離にあります。  
ここで、あなたはきっとお笑いになることでしょう！  
実際、このように安全に休んでいる私が、  
旅の合切袋の中身を空にして、  
ユダヤ人が生み出すものなら何でも、  
あなたと共有することは、私の心を高揚させます。  
こう言ってはほとんど不遜になりますが、  
粘着性の胆汁は三日も経てば観察できます。  
そして、癩癩には私たちの一派が知っているよりも  
幸せな治療があります。  
ここには灰色の背中に斑模様の入った蜘蛛がいて、  
糸は紡がず、ただ墓の基石を見つめています。  
五匹を取って、水に落としてみてください・・・  
シリア人の脱走者に、このことを委ねていますが、  
でも彼の心の中は誰にも分かりませんからね。  
痛む目を治すために、  
鼻の穴から鼻朶を吹き込んであげましたら、  
その恩返しとして、私に仕えているようです。  
待つのが一番いいようですね。

朝にはエルサレムに着くので、  
そこで自分の経験をまとめ、  
最も価値あるものを集め、  
それを全部あなたにお知らせします。  
あるいは、ユダヤのトラガカント・ゴムも加えましょう。  
より純粋な薄片となって剥がれ落ち、  
その木目はより透明に輝き、  
乳棒と乳鉢の間で割れています。  
要するに、我々の生み出すものを越えているのです。  
ハンセン氏病にとともよく似ている、  
頭皮の病気は私を困惑させています。  
私がゾアルで得た種類のを、  
あなたが賞賛されたことがありましたね。  
しかし、熱意は分別を越えています。  
ここで筆を置きましょう。

いや、待ってください。  
私のシリア人は感謝の思いで、まばたきしていますが、  
彼がこうして仕えるのは、  
私にとって重要なことだと思いますね。  
彼が盗んだとしても害のないようなことを、  
私が書くと思いますか。  
そもそも私に書こうと思わせたものが何かを、  
あなたに話そうと半ば決心しましたが、  
話そうと思うと顔が赤くなります。  
私には書くことについて疼き、痛み、棘がありました！  
というのも、この町の不毛さのためか、  
そうでなければ、その男の容姿に何かがあるのか、  
彼の症例はその価値をはるかに超えた、  
大きな印象を私に与えたのです。  
それで、(手近に新奇なものが押し寄せる中で、  
どうした訳か、この症例が私から知らぬ間に引き出した、  
関心と苦勞をすぐに失ってしまわないように、)  
今はほとんど目に見えています、  
心に新鮮な状態で覚えているうちに、  
このことを知ってください、とあなたに言ったとしても、  
どうかお許しください。  
あなたは真実を知りたいのですか。  
実は、まさにその男がたった今、  
私のところから出て行ったのですが、

その男の病気が話の主題なのです。

仔細しさいは次の通り。

あなたの優れた知識で全てのことを助けてください。

それは躁病そうびょうにすぎません。

過度に長引いた三日間の恍惚状態の転換点で、  
癲癇てんかんに付随して起こりました。

その時、薬によるものか、

まじないか、悪魔祓いか、

あるいは、私には未知のものですが、

知りたいと願っている技芸の一打ちによって、

突然、悪霊が姿を現したかと思うと、その男から出て行き、

その後、男の身体は完全に健全な状態になったというのです。

しかし、いわば命の門を余りにも広く開け、

余りにも突然、それを空虚な家にして、

どんなことが浮かんだとしても、

いわば（最初に来たものが、最初に仕えられる）という、

あの有利な立場で、最初に入ってきた着想を、

心の壁上に明白に書きつけることを喜んでいるので、

その後が続く概念は、地上に戻って新しく整えられた魂が、

新たに徹底的に暗記した空想の走り書きを

消すことはできないのです。

それ故、魂はまさにこれらを読むことになります。

まず、その人自身の堅い信念は、

彼は死んでいた（実際、人々は彼を埋葬したのです）、

確かに死んでいたのだが、

同じ部族に属するナザレ人の医者によって、

生き返らされたということに基づいています。

その人が「起きよ」と命じたので起きたのです、

と彼は言っています。

「そんな症例なら日常の出来事だ」とあなたは叫ぶでしょう。

この作り話は、そうではないのです！

そのような煙のように実体のない話が、

時間が経って、健康が回復しても、

命の心髄に食い込んでいるのですから。

ちょうど、サフランが肉体、血液、骨など、

すべてに浸透して染めあげるように！

見てください、いかに彼が来世の命を生き始めているかを。

この男はラザロというユダヤ人です。

多血質で、体の釣り合いのとれた五十歳の男で、

その身体の性質はまったく賞賛するに足るものであり、  
あたかも人に見せるために作られたかのように、  
普通の健康体を越えています。  
考えてみてください。

どんな薬を使って疲れ切った魂と悩む肉体に浸透させ、  
三日の眠りによって、それを清々しいものに変えることか可能なのかを！

この男は、全身をピカピカにする香油を、  
どこから手に入れているのでしょうか。  
この成長した男は、子供のように世界を見つめている。

これは仮定ですが、彼の部族の長老たちが、  
羊のように従順な彼らの友人を引き入れて、  
私の審問を受けさせたのでしょう。

時には鋭く、時には悲しみを込めて、  
彼らが話し合い、病状を語っている間、  
私が話しかけている時以外は、

この人は耳を傾け、両手を組んで、彼らに話を続けさせ、  
蠅がブーンと飛ぶのを見つめていました。

しかし、愚か者ではありませんでした。

これは、彼の人生の年月がこの先どのように進んで行くのか、  
その在り方の一例です。

人生のちょうど半ばに、乞食が宝を見つけた場合、  
硬直した習慣と、飢えのために痩せ細った味覚で、  
その宝を使いこなせるのだろうか。

物事を一瞬で変化させる、突然与えられた要因を、  
衰えた頭脳で即座に受け止められるのだろうか。

その要因は、夢に見たこともない歓喜を彼の手につかませ、  
昔の安っぽい喜びを、軽蔑された塵の中に入れるようなものなのです。

必要のない時に、用心深くしみたれていて、

不相应な時期に、酔っぱらったような浪費家だということは、  
彼が浮かれ騒ぐような類の人ではない、ということでしょうか。

何が黄金の中庸に相应しいかについての慎重な助言は、  
そのような男にはまったく通用しないのです。

この男の現実離れした意志には、それなりの法則があります。  
ここでは、その宝を知識と呼びましょう。

この知識は、まだ地上にいる人の魂に天が開いたもので、  
肉体の能力を超えて増大していきました。

地上は天を仰ぎ見つ、魂の働きを強要したのです。

その人は、全てのものと比較した上での、  
大きさ、数、価値を知らず、

それが多いか、少ないかも分かりませんでした。

彼の住む町を包囲するために集められた、  
法外な数の兵士たちのことや、  
瓢箪ひょうたんを乗せたラバが通ることについて、  
彼に話してみても、結果は同じことでした！  
ならば、それを違った風に考えて、  
何でもないことを話してみることにしましょう。  
そうすると、恍惚状態で極小のものを凝視することでしょう。  
(私が見る限り) 彼はその極小のものに、  
巨大な意義と全ての結果を把握したかのようです。  
それで彼は見物人の方を振り向いて、  
私たちが彼と同じように目を大きく見開いて、  
物事をしっかり見ている訳ではないと知り、  
いつもながら呆然としていました。  
(この点を注意してください。)  
驚きと疑いが相反する目的に向かって、  
途方もなく間違った方向に働き出すのです。  
仮に自分の子供が病気で死んでも、  
何と、その陽気さはほとんど無くならず、  
日常の仕事を中絶することもないでしょう。  
一方で、遊んでいたり、学校にいたり、眠っている、  
その同じ子供からの言葉、仕草、一瞥が、  
今度は、彼を驚かせて恐怖や激昂の苦しみを抱かせます。  
仮に「それは単なる言葉や仕草に過ぎない」などと反論すると、  
あなたをまじまじと見つめます。  
ちょうどピラミッドに一人で住んでいた、  
私たちの師匠が私たちを見つめたように。  
覚えていますか。  
若い頃、私たち二人は師匠の蔵書の中の例の書籍から拾って、  
呪文の冒頭の句を勝手に唱えましたね。  
あの呪文は恒星を大きく振動させ、  
こなごなに砕き、星々に変えることが可能なものでした。  
古い恒星にはよくあることです。  
師匠から見た昔のあなたも、ラザロから見た子供も、  
それぞれ同じように頭に覆おおいをかけています。  
覆いの下から、二人とも闇雲に手を伸ばして、  
知らぬが仏ほとけですが、ギリシャ火薬の地雷の上で、  
マッチもてあそを弄もてあそんでいるのです。  
彼は命の糸にしっかりと捉まっていますが、  
(それは、否応なしに生きる命なのです)  
その細い糸のどちら側にも、

心を散らすような、巨大な栄光の世界があつて、  
命の糸はそこを横切って走っています。  
彼はそれを意識しているのですが、  
まだ、そこに入つてはならないようです。  
地上の生活の周りにある霊的生活！  
霊的生活の法則は、この地上生活の法則のように  
彼に知られていません。  
彼の心と頭脳はそこへと動くのですが、  
足はここに留まっているのです。  
それで、この男は湧いてくる衝動に困惑しています。  
突然、このような衝動は真直ぐにはなく、  
交差するように突き上げてきて、  
「こうあるべき」が「地上ではあり得ない」によって妨げられる、  
炎のように輝く霊界を貫いている黒糸のような、  
現世の基準に沿うことなく、  
向こう側の天界では、何が正義で、何が悪かを、  
この男は宣言するのです。  
あたかも、ラザロに向かつて「起きよ」と命じ、  
それに応えて彼が起き上がった時の、  
あの賢者に再び見え、その声を聞いているかのように、  
この男の魂は、あの人の顔を目がけて飛び上がります。  
何ものか一言葉、あるいは体内の血液の鼓動が彼を教え諭すのです。  
するとすぐに、以前はまさしく火と燃えていたが、  
今や灰となったものに沈み込み、  
日ごとのパンを得るために、自分の仕事を再開したのです。  
あの誇りの故に、かえって謙虚になり、  
神の秘密を知っているが故に、  
より誤りを犯しがちな人間が、  
他ならぬ自分であると告白しています。  
もっとも一方では、この命の糸を握りしめているのですが。  
確かに、その男の特徴は、  
天の意志が何であるか、何故そうであるのかを知って、  
その意志にひれ伏し服従していることです。  
今や、早すぎる成熟によって切り離された魂を  
肉体が開放したからには、最期まで耐え忍び、  
自らの存在を平静へと回帰させる、  
あの時と同じ死を待つつもりだ、と彼は言うのです。  
彼は生きるつもりです。  
否、神が喜ばれる限り生きることは、  
しかも、神が喜ばれる生き方で生きることは、

彼の喜びなのです。  
神が喜ばれる以上に、神を喜ばせることを彼は求めています。  
(それはまた、違った意味合いになるからです。)  
それゆえ、それが何であれ、  
彼が自分の一派の教義を説きたがっているとは思われません。  
狂人たちがしたがるように、  
改宗者を作りたいとも思っていないようです。  
確かに、熱心ではあるけれど、  
いったいどうやって彼は本当の土台、  
彼自身の確信を隣人に与られるのでしょうか。  
彼の偉大な真理は偽りだ、とでも言ってごらんなさい。  
それでもなお、「神の御心のままに」という言葉が、  
彼の自信を取り戻してくれるでしょう。  
私は言いました、  
「獣のような人よ、お前の町、民族、お前の狂った話、  
それから、お前自身を一纏めにして、  
小さな火花のように踏み消そうと、  
ローマ兵が進軍してきている時に、  
いったいどのようにして、  
ほんやりして、注意を払うこともなく、  
お前は満足しておられるのか」と。  
彼はただただ、大きな目で私を見つめました。  
その男は無感覚だ、などと推論されるのでしょうか。  
本当はその反対で、彼は老人も若者も、  
有能な者も弱い者も両方を愛していて、  
まさしく獣も鳥も好むし、  
何と言いましょうか、  
それに加えて野の花も好むのです。  
それは、ちょうど賢い職人が師匠の仕事場で道具を称えつつ、  
道具が作るものを愛めでると同じです。  
このような男は、羊のように害がありません。  
ただ、無知と不注意と罪に対してだけは、  
できる限り我慢しようとしても、  
この男は、どうしても耐えられないのです。  
もっとも、このような憤慨も即座に抑えられますが、  
ちょうど幾度かの旅で、前もって考えられた計画に従って、  
私は無学のただ人のふりをしていたが、  
無知の故に、さも高尚なものとした見解に浸っている、  
地元の医者たちが病び気の原因と治療法について、  
勝手に無駄話をたまたまするのを偶々耳にしても、



口をつぐまねばならないのと同じです。

あなたはきっと異議を唱えられることでしょう。

この報告の前に、何故この治療を施したナザレ人の賢者自身を探し出して、病源を調べ出し、適切な率直さで協議しておかなかったのか、と。

ああ、なんと悲しいことでしょうか。

あの学識のある医者、何年も前に大騒ぎの中で、

私たちの学問の宿命だとはいえ、

聞くところによると、

異常な王国の支配と信条を打ち立てようとしたとして、

魔術、反逆の<sup>かど</sup>廉で責められて、

非業の死を遂げてしまったのです。

地震が発生した時に、彼の死は起きました。

(これはすぐに明らかになったように、

ピラミッドの中に一人で暮らしていた、

私たちの師匠である賢者には、

オカルト学の敗北を予表するものでしたが、)

その死は狂った民衆によって齋<sup>もたら</sup>されたものです。

推測するに、民衆が奇跡的な救いを求めたので、

彼の力が試されることになったのですが、

結局、彼を頼ったのは無益であったと感じた、

民衆によって引き起こされたのです。

それが民衆の常ですね。

一体どうやって、彼が地震を止められたというのでしょうか。

それが民衆のやり方です！

その他の非難もでっち上げに違いありません。

それをあなたに教えたくはないのですが、

立派な人の名声に対しては、

誰にでも敬意を表したいので、

一つだけ述べてみましょう。

(結局、私たちの患者は完全に狂っています。

彼の言っていることを<sup>ま</sup>真に受けていいのでしょうか。

多分、だめでしょう。

ただし、医者到手紙を書く際には、

症状を包み隠さず述べる方が良いのですが、)

このように癒された男は、

その時、癒してくれた者を

— 神よ、お許してください！

神自身に他ならぬ方、地上にしばらくの間だけ降臨した、

世界の創造者にして維持者と見ているのです！

— 彼が言うには、  
そのような者が誕生し、生きて教え、病人を癒し、  
自分の家ではパンを裂き、その後、死んだのです。  
私の知る限りでは、彼の傍<sup>そば</sup>にラザロを置いていました。  
しかし、・・・それから私が先ほど言ったことが起きたのです。  
それを繰り返したくはありませんが、  
まさにこのラザロが聞いている所で、  
彼は自分がそのような者だと告白したに違いないのです。  
この男が言ったのは・・・。  
でも一体何故、彼が言ったことを逐一<sup>ちくいち</sup>  
書き留めなければならないのでしょうか。  
他にも述べる必要のある重要な事柄<sup>いづつ</sup>が何時でもあるのに、  
こんな些細<sup>ささい</sup>なことを、どうして書かなければいけないのですか。  
池の畔<sup>ほとり</sup>にアレッポ種のポリジが、  
青い花を豊かに咲かせていますが、  
硝石<sup>しょうせき</sup>を多く含んでいます。  
不思議なことですね！

いま振り返ってみると、  
過度に詳しく考察され、冗長に述べられた、  
この長くて退屈な症例紹介<sup>なにとぞ</sup>を何卒ご容赦ください。  
この男が私の内側に呼び起こした、  
特別な興味と畏敬の念、  
それを引き起こしたと信じるに足るもっともな原因が、  
この手紙の中に書かれているようには、  
私にも思われません。  
恐らく、旅の終わりに臨んで、  
初めて疲れが私を襲って来たのでしょう。  
年老いたライオンの臼齒<sup>きょうし</sup>のように、  
鋸<sup>のこぎり</sup>の鋭く尖った短い刃のような、  
山の尾根を越えて来たからでしょう。  
多形、多種、そして威圧<sup>あご</sup>的な痣<sup>あざ</sup>がついた、  
人の顔のような月が出ています。  
それから、私の背後では風が起こりました。  
そのため、この男と私はこの古くて眠たそうな街で、  
出し抜けに出会ったのです。  
あなたには報告書をお送りします。  
届いたら幸運と考えてください。  
この覚束<sup>おぼつか</sup>ないシリア人に、  
あえて危険を冒して託したのですから。

彼は手紙を失うかもしれませんが、  
盗むかもしれません、  
あるいは、あなたに手渡すかもしれませんが、  
どちらにしても、同じことです。  
エルサレムでの休息は、(もっと価値のあることを書いて)  
この手紙が無駄にした時間の埋め合わせをすることでしょう。  
その時まで、もう一度あなたのお許しを請いたく存じます。  
ごきげんよう！

アビブ、考えてみてください。  
まさしく神！  
理解できますか。  
それで、全能の神はまた全てを愛する神でしょう。  
それで、雷の中から人間の声が聞えて来ます。  
「ああ、私が作った心臓よ、  
心臓はここで脈打つ！  
私の手が作った顔よ、  
私自身の中にそれを見なさい。  
あなたには力がなく、私の力を認められない。  
しかし、私はあなたに愛を与え、  
私自身を愛する対象とした。  
あなたのために死んだ私を、  
あなたは愛さねばならない！」  
彼がそう言ったと、この狂人は言うのです。  
不思議なことです。

## 注

この翻訳は、ロバート・ブラウニング (Robert Browning) 作「書簡 — アラブの医師カーシシュの不思議な治療経験を含む —」(An Epistle : Containing the Strange Medical Experience of Karshish, the Arab Physician) の全訳である。この作品は『男と女 (*Men and Women*)』(1855年) に収められたもので、アラブ人医者であるカーシシュが医学の師匠であるアビブに書簡を送るという設定になっている。カーシシュは放浪の学者として各地を旅しているが、エルサレムの近郊のベタニアでラザロというユダヤ人に会う。このラザロは「ヨハネによる福音書」第11章に登場するマリヤとマルタの兄弟ラザロであり、現在は五十歳になっているが、自分がかつて三日間死んでいたがナザレ人の賢者によって生き返らされたと信じている。この不思議な「症例」をカーシシュは医者視点からアビブに説明する。翻訳に当たっては、底本として Ian Jack and Robert Inglesfield ed., *The Poetical Works of Robert Browning*, Vol. 5 (Oxford: Oxford UP, 1995) pp. 89-102を使用した。

